

麻生路郎主幹

川柳雜誌

六月號

川柳雜誌第三卷第六號目次

感想・評論

川柳書架 各地柳壇
川柳家戸籍調べ 編輯後記

明窓漫筆 麻生 路郎
明暗帳 井上 刀三
作家之自選 塚崎 松郎

創作

近作 麻生 路郎
川柳塔 塚崎 松郎
森田 輝翠

研究・其他

一茶の事ども 駒井美の作

口語體の句(續稿) 麻生 路郎

唐柳短解 蛭子 省二

新戎橋より 万よし 生

勸進帳 錦粧 軒
竹馬 居軒

柳談會に列席して 茨豆 生

花童子氏歓迎 同人

募集句 同人

犬 蛭子 省二 選

煙 麻生 叟乃 選

本社五月例會 二 柳子

神戸句會 近作柳樽

諸家

橋本二柳子

庄万よし

黒木 茨豆

麻生 叟乃

龜井花童子

岩崎 柳路

井上 刀三

高橋かほる

林出 馬行

酒井 駒人

喜田 飯山

森田 輝翠

塚崎 松郎

麻生 路郎

川柳雜誌社同人

主幹

藤生路郎

| | | | | | | | | | | |
|-------|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 岩崎柳 | 伊藤彦 | 井上三 | 馬場月 | 原史 | 橋本馬 | 西垣松 | 德田双 | 太田朝 | 太田底 | 河津放 |
| 龜井花童 | 吉川啞 | 高橋かほ | 高見柳 | 竹田蘆 | 竹内多 | 竹崎松 | 塚木葵 | 黒木大 | 矢野洲 | 松川右 |
| 子人る | 人 | 骨 | 穂 | 聞 | 郎 | 豆 | 臣 | 馬 | 六 | |
| 藤本卯之助 | 駒井美 | 麻生 | 佐々木 | 酒井 | 喜田 | 三好 | 宮内 | 庄 | 關 | |
| 乃作 | 乃作 | 乃作 | 乃作 | 乃作 | 乃作 | 乃作 | 乃作 | 乃作 | 乃作 | 乃作 |

(いろは順)

| | | | | | | |
|--------------|---------------|----------------|----------------|---------------|----------------|---------------|
| 道頓堀支部 | 天満支部 | 岸和田支部 | 鶴町支部 | 城南支部 | 六甲支部 | 淀川支部 |
| 大阪市南区新我橋南詰 | 大阪市北区南同心町二丁目一 | 岸和田市下野町四一九 | 大阪市港區鶴町三丁目一〇 | 大阪市東區餌差町二二一番地 | 兵庫縣武庫郡六甲若樂園 | 大阪市東淀川區南濱町一九四 |
| 幹事 庄 | 幹事 原 | 幹事 野 | 幹事 太 | 幹事 駒 | 幹事 佐 | 幹事 西 |
| 萬よし | 史 | 朝 | 本 | 美 | 木 | 垣 |
| 神戶支部 | 山口支部 | 豐中支部 | 東京支部 | 函館支部 | 住吉支部 | 仁川支部 |
| 神戸市湊町二丁目電氣局西 | 山口縣山口町石原小路 | 大阪市外豐中榮通二丁目石賀方 | 東京芝區愛宕町一ノ六大成社内 | 函館市青柳町五〇 | 大阪市住吉區安立町五丁目二二 | 朝鮮仁川仲町一丁目八 |
| 幹事 庄 | 幹事 柳 | 幹事 林 | 幹事 岩 | 幹事 龜 | 幹事 德 | 幹事 矢 |
| 萬よし | 川 | 田 | 崎 | 井 | 田 | 田 |
| 馬 | 洲 | 馬 | 柳 | 花 | 雙 | 右 |
| 馬 | 馬 | 馬 | 馬 | 馬 | 馬 | 馬 |



近作

麻生路郎

柳路、千代二の二君が宿へ訪れてくれた。三人で話してゐるさ東京にあるやうな氣がしなかつた(旭館にて)

東京語 大阪辯の宿もよし

朝陽の令園が亡くなつた。四月に二女を擧げてよるこび、五月には彼の女自身幽明境を異にす。無常迅速さいふべし

子のこゝで最後の唇が動きしか

川柳の愛護者、上總天香先生、池田室町の自邸に永眠せらる

夕刊の漫筆 靴になつたまま



明窓漫筆

麻生路郎

近ごろの川柳家（明治の末葉から大正の今日まで）は、何人からも、指導されたり、啓發されたり、教化されたりすること、をよろこばない。事實は、指導されてゐながら、啓發されてゐながら、教化されてゐながら、決して指導されたり、啓發されたり、教化されたりしてゐることは思つてゐないのである。

夫れ等の川柳家は、みんな、自分免許でいつの間（に）やら、ひさかぎの川柳家になつてゐる。さうして、同じやうな連中を驅りあつめて雑誌を出す。忽ちにして自分免許の選者となる。夫れでもはじめのうちはいさゝか良心にさがる點がある（見）て編輯局選だとか、同人選だとか胡魔化してゐる連中もある（

稀には謙讓な態度の人もある）が、それも長いことは續かない。二號か三號になれば、たちまち馬を陣頭に進めて、ひさかぎの選者となり、小學校の作文をしりへに墮若たらしめるやうな愚劣な、滑稽な、出鱈目なことをかきながつてゐる。それが近ごろの川柳家の好典型なのであるから、いつまでたつても川柳が社會的に認められないのも敢て不思議でもなんでもない。

彼等は先生を持たないさ（い）ふこと、先輩を無視する（い）ふことによつて自分を造りあげやうとしてゐるやうである。そして先生なきから指導されたり、啓發されたり、教化されたりしてゐるは、他の猿真似川柳家に對して、何んだか肩身が狭いやう

に感じてゐるらしい。

自己を磨いて（揚足を取つたり自分免許の選者になつたるするこゝ違ふ）偉大な作家ミなるやうに心がけやうミはしないで、先輩を自分等の低級なミころまで引きずりおろしておいて、同じレベルに立たうミしてゐるやうである。

それが證據に彼等は決して、先輩の苦しんだ句に對して尊敬を拂ふミいふこゝをしない。深く味はつて見やうミはしない。正解をしやうミはしない。教をうけやうミはしない。自分等に意味の解しかねる句でもあらうものなら、たゞちに、その先輩の句をけなしはじめる。自分等に解しかねる句は川柳ではないやうな暴論を平氣で吐く。



そんな時には必ず、革新といふ言葉、傳統といふ言葉がかつぎ出される。自分等の解し得る句は傳統派の句であり（そのくせ傳統派の寶典の柳樽すら満足に讀破してゐるものは殆どない。まして御先祖の句の解釋ミ來たら、一向御存じのない連中なんだから笑はせる）自分等の解しかねる句は革新派の句ミして一笑に附してしまふのであるからいつまで待つたミて、川柳が發展もしなければ向上もしないのは當然すぎるほぎ當然なことである。

そして彼等の頭の粗雑なこゝは、傳統派にあらざるものは、皆所謂革新派に屬してでもゐるかのやうに思つてゐるこゝである。そして、傳統派でもなければ革新派でもないミ云へば、すぐに灰色でもあるかのやうに考へてゐるのであるから全く嘔はすにはゐられない。この言葉は所謂革新派の一部の人々に對しても云へるのである。



私は所謂傳統派でもなければ、所謂革新派でもない。それは私が説明するまでもなく私の過去の十數年間の句をみればすぐにわかるこゝであるが、何んミか派ミでも云はなければ氣のすまぬ人達には人生派ミでも答へておかう。

私は傳統派の川柳が全く川柳ミして無價値でもあるかの如く考へてゐる人達に、もう少し傳統派の川柳ミいふよりも古川柳の中のあるものを深く味はつて貰ひたいと思ふ。たゞ既成川柳は死物に等しきものであるミして、捨て、願ひないミいふこゝは、賢明なる革新派の人達のために惜まざるを得ないのである。

同時に傳統派の人達も又、既成川柳の妙味をのみ徒らに云々して、川柳の進化に對して何のあづかるこゝろのないこゝは自己の時代の川柳を生まないこゝであるから、所謂革新派の

人々から、全く川柳を玩弄するものにして取扱はれても一言半句もない筈である。

傳統派川柳家の謬見は、既成川柳が完成された川柳だとするところに發生してゐるのである。彼等は、既成川柳を、全く完成された藝術だと思ひ誤つてゐるために川柳の革新を叫ぶことを全く邪道視するのである。

從來傳統派を力説してゐる川柳家の作品を観るに、彼等には心境の上に、情緒の上に、進化といふことを考へてゐない。常に變化といふことに煩はされてゐる。單に甲ごこちを取換へて、もつて満足してゐるに過ぎない場合が多い。であるからして、又しても一見新しい句の如く観れても、驚籠が自動車に變つたにすぎないことが、あまりに歴然としてゐて、これでは駄目だといふ嘆聲を發せずにはゐられないのである。私から見れば、も少し新しい感覺の下に句が生れなければならぬものだと思つてゐる。

然らば、所謂革新派の句はさうか云へば、これ又二三の人のをのぞけば、新しい皮を被つたセンチメンタルな句の羅列であつて、さうに革新の名に相應しい川柳なのであらうかを怪しませる。こんな句を指していや革新がさうださか十人が十人共分

らない句を作つてゐるさかいふて騒いでゐる傳統派の人達の笑止さ加減にあきれ外はない。何故、それ等の句のほんごうに駄目なことを指摘しないのであらう。いつも逃げ腰で愚論を吐いてゐるところを見るに、鳥が羽ばたきをしても源氏が攻め寄せたと思つた平家のそれにもまして、びく／＼ものであることが知れる。

彼等は最後にいふ、「そんなに傳統派の川柳があきたらねば川柳の名を捨てたらいゝではないか」と。いつまでも、川柳の名に未練を残すには及ばぬではないか。さうした言葉は、傳統派の人達にまつて敵の虚を突いた實に名言でもあるかの如く思はれてゐるが、之は全く、彼等自身の弱さを曝露してゐるものであつて、決して革新派に一撃を與へたものでも何んでもない。前にも述べたやうに、既成川柳が過去に於て完成の藝術であれば、その圏外にあるものに、川柳の名を被らしめることゝは、川柳を冒瀆するものであるかも知れぬが、既成川柳は要するに既成川柳であつて、完成せる藝術ではないのであるから更に我々の時代により完成への道を辿らなければならぬ者なのである。そこに行くべき新しい道が展開されねばならぬのである。所謂卓進派の辿つてゐる道も、其一つであるかも知れ

ない。私達の行かんとする道も、その一つであるかも知れない。



革新川柳が、自らの川柳に飽き果して、更に川柳にあらざる方面へ行きつくした事を自ら悟つた時には、おそらく、傳統派が川柳の名をもつてせよと強請しても、彼等は必ずや他の名をもつて呼ぶに至るであらうと思はれる。

彼等は川柳の革新を企てゝるのであつて、川柳にあらざる別個の詩を求めてゐるのでない限り、川柳の名をもつてしたところ、それを鬼や斯ういふことは僭越たこと云はなければならぬ。



何れにしても、川柳家は、もう少し敬虔な態度にかへらなければ川柳の發展を期することは覺束ない。常に不真面目な態度をもつて川柳界にのさばり、自分自身がいい意味の川柳家ならぬばかりではなく、他人達をも同じ地獄に陥れやうとしてゐる川柳家の多いことをかなしむ。私達は先づ第一に真面目な川柳家にならなければ、そしてお互に大いに研究して、指導もし、されもして、川柳そのものの藝術的價値を充分に發揮せしめなければならぬ。

自分に解し得ぬ句に對しては、門戸をこざしてしまふやうな

狭量で、無智な態度から、一日も早く覺醒しなければならぬ。天才や先輩を自分等と同じレベルにまで引きずり降ろすやうなことは、もういゝ加減に止めなければならぬ。いつまでもさうした事を繰返してゐては、いつの世にか川柳が光りあるものにならう。従來の川柳のようこんでゐた低級なデモクラシーは眞のデモクラシーではないといふことを知らなければならぬ。



「川柳雜誌」が初心者指導をもつて任じてゐるながら、その巻頭の路郎氏の句はあまりに新しすぎるるか、難解すぎるるかといふ言葉を最近耳にしたが、これについて私は少しく筆序に書いておきたいと思ふ。

いくら初心者指導する雜誌であるから云つて、その句を傲の生へたやうな古川柳まがひの句にしたり、又、誰にでも必ず分るまいふ句にすることは出来ないことである。殊に川柳を社會に宣傳する使命をもつてゐる雜誌においておやである。

初心者を指導する雜誌であるから云つて、畫家自らが幼稚な畫を描き自己の名によつて發表すべきものか、さうかを一考されたい。



川柳塔

塚崎松郎

○
我がひたひなら脂汗も許し
子を抱かされて雀にものを云ふ
佛檀の灯にてかてかこ栗饅頭
女房の手前を思ふ年になり
未來までも女房さはあんまりな
糸巻にもゆる心を走らせて
惚れた女の寝顔がさびし
背の子の夢がかすかに揺れてゐる
恩人をさむしがらせる程に酔ひ
病人がバツチりあけた眼のさびし

森田輝翠

○
話さねば花咲く時季が無駄に過ぎ
藤の花冷酒も好し壽計も好し
戀心まだ筍は盛りなり
諦めの世界へ母を連れて行け
送別に牡丹はつきり開いたり
○
なぐさめに行けばちびく飲んでゐる
焼けたのは貧乏人の家ばかり
船と船はくくくすれちがひ
小使の電話用件だけですみ

喜田飯山

お早うお早うとすぐにはんを持ち
遠くから見ればモスやら綿紗やら
やめるので陳列棚もごみだらけ

朝陽氏夫人を悼みて(一句)

ふざ見ればつかひてのなはいはみがき粉
朝顔の咲く上に干す白がすり
端居して木を割る人ご話合ひ

○ 酒井 駒 人

假親の義理を養子はもう忘れ
婦女界の通りに娘髪を結ひ
女將又茶呑話しにしてしまひ
悪人になつて此場は納めたが
金魚屋を仲居が圍む午後三時
襷掛なんにもせず本を讀み

○ 林 田 馬 行

添ふて十年變らぬものは厭なり
セルを着て働く心しきりなり
金儲けの下手だつた父が嬉しく
啄木さきけば見知らぬ函館の街
僕が死んだらなごゝ女さふたりきり

平凡な平凡な男に女をさられ
鮮やかな欺されぶりに諦めて

刀三、霧太病む

氣焔きかして呉れぬ枕許のうざん

○ 高橋かほる

園はれて本家のおかづ聞いて見る
失戀の影がピアノにまざく
うざん屋で子持は遂に座らされ
小咄を讀んでクシヤミを一つする
書置きに疊るまき繪の硯箱
ボンピアンつけるに鼻がちさ低く

○ 井上 刀三

感激を仲仕薄暮の中に知る
嬉しさへ馬鹿さ云ふ字が重りて
結極は苦しめくばかりなり
白日の下親を忘れた酔が出る
伯爵に生れる事も無駄でなし
酒を飲みおる候に手紙書く
熱のある日は旅人の心なり
天國へ一直線に乙女の死

エスカレーターに若い妻君乗つて居る
蕙屋の寝る頃父が歸つて來
赤インキ流した様な日本地圖
君ご僕ライスカレーへ差向ひ
紺サージだいぶん古い光りやう

○ 龜井花童子

帳合で出るニア人へドアがあき
往復に一錢足らぬ紺紺
毬つきに廻り損ねて一つ借り
顔ぶれを見廻してから膳を出し
末つ子が居たらご思ふ映畫見る
ほつちりご一軒竹の子飯の文字

○ 麻生霞乃

盲信の力強さを子に見る日
他國まで續く菜種の畑ご見ぬ
腕時計忘れ出る程あはたゞし
懐にあるやさしさの陽にうたれ
残飯で卵を生ます話なり

○ 黒木莢豆

茶の花の男好きそらまめの色好春。日のあらは

てんたう虫のぢんべが赤い祭ぐる
あらしのなかにさんらんたる性慾の手
信心にうつる地蔵のよだれかけ
戀をむさほるにうつらぬきもの
暮れるつゝよそくしくなれり藤の花
春の海しゆらしゆらごして夏の海

○ 庄万よし

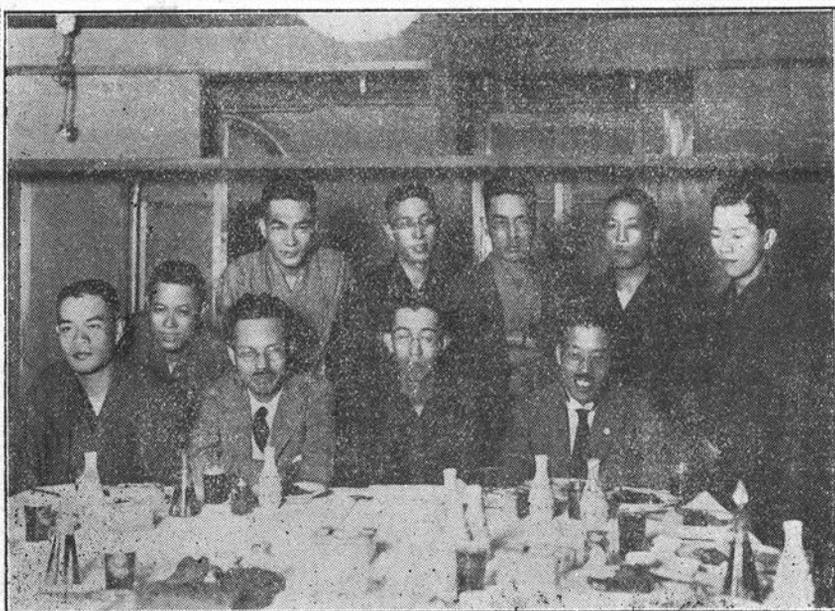
商船もかもめも折もみんな浮き
女房からノホホンらしく言はれてる
菜の畑西洋館をのけましよか

○ 橋本二柳子

人ごみへ女の聲が續くこご
電柱の影が自殺の姿なり
灯の端で金魚は光つてる
妾宅の庭ごは知らず金魚は泳ぐ
看病の窓へ金魚はひるがへる
すゝり泣く時に金魚が光つてる
返事だけはれやかにする娘にて

朝陽令園の死を悼む

麥の花立てゝ淋しさせまり來ん



花童子
歡迎
落語を聴く會

◆五月二十日の夜◆

同人花童子が再び來阪した
燕のやうに飄然として。

北陽の花月で、落語を聴くことにした

花童子を中心にして。

これが花童子やら知らぬ同人も交つて

落語を聴く。

お互に顔を見合しては笑ふ數時間……

春團治に白髪が殖わたり。

浪花踊の街へ出て、はつ夏の夜を

ゴールドン、スターの小宴。

記念にこゝて寫眞屋さんを呼びにやつた

夜は更けてゐるが。

やがて自動車が東西南北へ走り去つて、

雨の音のみする。

▼前列向つて右より、卯之助、花童子、路郎、放馬、後列

右より、かほる、二柳子、美の作、松郎、革郎、萬よし

(櫻橋ゴールドン・スターにて)

▼外に多門と馬行も出席したが差支があつて花月で別れた。



一茶の事ども

—常住座臥の人事詩—

駒井美の作

俳人一茶が死んでから今年が百年忌に當るに云ふので随分一茶の事が一般に宣傳された。然し川柳家は一茶なきを考へ合せた人は一寸見當らない様である。わけてこんな際から故人に對する研究出版物も流行的に好い事が悪い事かわからないが菊の如く續出された。兎も角今更申す迄もなく本當の一茶はまゝ逸に見ゆる。其句作を全く違つて其一生涯は徹頭徹尾所謂苦勞人の境涯であつた事だけは誰人にも知れ渡つた事實故郷は繩まで人を蝨しにけり』の一句にでも故人の暗い半面の生涯が窺ふ事が出来ると思ふ。川柳は相當苦勞人でなくてはつくれな

い。此意味に於て實際我々川柳家にも苦勞人が多く、そして各人の其種々の苦勞の體驗がやがて各の川柳に顯はれて人情の機微に觸れる様な場合が多い。川柳は軽いもの可笑いもので單に川柳家は惡口唇位にしか考へてゐない人々は丁度今日迄俳人一茶の事實を知らなかつた人達と同じ様に私は思はれてならぬ。一茶はそれに芭蕉なきを違つて改まつた弟子等を殆ど持つて居なかつた。こんな事も川柳家の平民主義的な處にもよく似てゐるし、従つて芭蕉の様に旅に出る機會なきも少く、彼の句作に於いても自然よりむしろ常住座臥の人事詩に優れてゐるのが多いのも川柳家の心に通ふある感じがする。然し、大略俳句が自然詩に川柳が人事詩であるが如く一茶は田園の人で川柳家の多くは都會人である違ひはそこに在る。

一茶は一生殆ど腹からの笑ひは無かつた。そして殆ど孤獨な

彼は句作の上で僅かに其微笑を洩らして慰めた。

陽炎や手に下駄はいて善光寺

やれ打つな蠅が手をする足をする

等の句は一面善光寺に詣るるさを憐れむだ誠は句で有り、寂しい彼は蠅に迄涙を持つ便りない貧しい身の上で有つた。

雀の子そこのけそこのけ御馬が通る

なんのその首はぬくまい年の暮

我戀は婆になりたる十夜かな

頼べたに當てなごしたる眞桑かな

眞桑瓜の句は晩年に生れた子を失ひ、其子供の夢を見た時の彼の句である。こんな工合に一句々々靜かに見て行くは呑氣飄逸どころか、そこに一茶の淋し味や、あきらめや、悲し味がにじみ出てゐる氣がする。句味は勿論違つても川柳味に於いてもさうか相通する點が有る様な氣が確にする。他に蕉門の唯然あたりは一寸句風が一茶と同じ様に見へるが、第一是は性格が確に奇行變人の方に擧げらる可き人で兎も角一茶は善光寺に近い郷土の關係上民衆佛教の淨土門の信者であり冷たい周圍の環境の爲多少ひがんだ性質は有つたかも知れないが唯然の様な決して變人の部に屬さず一個の田舎者で所謂苦勞人で人間味が有つた處が我々川柳子から見ても面白く俳人一茶さしても又かへつてこ

ゝが何より尊い點であるを考へられる。曾て江戸にのほつた時にも「掠鳥三人に呼ばるる寒さかな」も正直な自分をそのまゝ彼は口吟ひでゐる。私が一茶の郷土信州の柏原をたづねたのは、十二年前大正三年の夏で赤倉の温泉から木下李太郎氏二人で佐渡へ行く田山花袋さん一處に途中迄歩いて行つた。そして其後田山さんが「海を越へて」云ふ小説をかけた時私も當時青年として其中にかき込まれてゐた。今でも明尊寺の夏草の中に立つた墓を李太郎さん探して野尻湖の旅館で鯉の洗ひを喰べて夕方又温泉へ歸つた事を覺へてゐる。近頃聞く野尻湖畔も避暑地として赤瓦の別荘が出来たり、「これがまあ己の在所か雪五尺」も彼が自分の佻しい郷土を呪つた其五尺の雪の上を冬は近來スキーで現代の青年淑女もやらが滑つたり轉んだり盛んにでんぐりかへしをうつたりしてゐる様である。死んだ一茶も、さうして没後百年忌等いふ本屋さんの今日流行の宣傳もやら等は少しも考へず、薄暗い土蔵の中にポツチリ一人靜かに眼をつむつて終りを遂げたのである。私は一茶の性行に於いて、もし故人を都會に生れしめたならば俳句より或は川柳に親しみを持つた人の様な氣がしてならない。



唐柳短解

蛭子省 二

百里の外に負ひたりき、親没せし後南の
かた楚に遊ぶ、従車百乘積粟萬鍾菌を累
ねて坐し鼎を列ねて食す、藜藿を食ひ親
の爲めに米を負はん子願欲すれども得べ
からざるなり、子曰く由や親に事ふる
生事には力を盡し、死事には思ひを盡す
と謂ふべし。

鶏を子路おんのけてうんごしよひ

(四十五篇樂輸)

米しよひに子路かき聞けば黒いひ

(狂句)

狂句は悪かな事に考ね及ぶものである、

(一三)羊泥棒、みつさんだ、みつさんだ

論語子路篇 葉公孔子に語つて曰く、吾

黨に躬を直くする者有り、其父羊を攘る

而して子之を證す、孔子曰く、吾が黨の

直き者は是れに異なり、父は子の爲に隠

し、子は父の爲めに隠す、直其中に在り突

(一四)蠅をくふやうだ、咄す、夏侯惇

(四十三篇玉章)

曹操の軍、夏侯惇外二將に五萬の兵を以

て徐州の境に、呂布の軍と相まみゆ、夏

あり「孝哉閔子騫、人不問於其父母昆弟

之言」又側に待す閔閔如たりともあ

り「雍也篇に「季氏閔子騫を費の宰と爲

さしむ、閔子騫曰く善く我が爲に辭せよ

焉、如し我れを復する者有らば則ち吾必

ず汝の上に在らん矣」もある、

(二二)上白は九合します、子路曰く

中白いするふんい、子路が母

(二十一篇如釜)

孔子家語致思篇 仲由字は子路、孔子に

見わて曰く、負重涉遠不擇地而休、家貧

親老不擇祿而仕、昔、由の二親に事へし

時常に藜藿の實を食ひ、親のために米を

(二一)蘆の穂は着ても、繼母に角く、ます

蒙求「周の閔子騫名は損早く母を喪ふ、

父後妻を娶り二子を生む、衣するに綿絮

を以てし、損を妬みて衣するに蘆花を以

てす、父損をして車を御せしむ、體寒く

して朝を失ふ、父其の故を察知し後母を

出さんご欲す、損曰く、母在れば一子寒

し母去らば三子單ならむと、母聞きて悔

ひ改む」

蘆の穂を着ても心のあたたかさ

(四十三篇かき)

損は魯の人孔子の門人少なき事十五才、

顔淵に亞で德行の人であつた、論語に「

德行は顔淵、閔子騫、冉伯中、仲弓」ミ

侯倅鎗を搦て、呂布出でよ勝負せむこ呼はりければ、曹性走り寄りよく扱て兵こ射る、其矢夏侯倅の左眼に中りけれき事こもせず、矢を抜く、鐵目の珠こ俱に出けるを大音あけて、此は父の精母の血なり、空しく棄つべきようなしこ口に入れり、啗了り、曹性に飛掛つて一鎗に突殺す我が國にも類似の武勇談がある

景政が片眼を拾ふ 田螺かな(其角) 血眼になつて景政追つ駆ける(古句) 權五郎目ざす敵は彌三郎(同) 凱陣に景政一人顔がはり(同)

景通に景久景政の二子があつた、景政は鎌倉權五郎云ひ後三年役に義家の軍に従ひ敵將烏海彌三郎のため右眼を射抜かれた儘追撃した、後戦友矢を抜かむこて顔を足をかけむこするを怒つて許さざりし云ふ。

(一五)大根は白髪、うてこのたまわく論語神黨篇「食は精きを厭はず、脛は細きを厭はず」

(一六)酒許り勝手にしろこ孔子いひ同篇「肉雖多、不便勝食氣、惟酒は量無きも亂に及ばず」

(一七)面白や花間笑語の仲の町

山口は花間笑語のゑみはじめ『扇屋へ行くので唐詩選ならひ』(二十篇乙丸)で扇屋へ行かなくても川柳家は唐詩選に親しむ要がある、後句は仲の町のこりつけの茶屋が山口巴であるから、始めこ狂的に笑はして居る、

班婕妤

王維

怪來妝閣閉

朝下不相迎

總向春園裡

花間笑語聲

(一八)相逢ふて愁苦を問へば雪月花

見尔兆章參軍量移東陽 李白
潮水還歸海 流人却到吳
相逢問愁苦 淚盡日南珠

(一九)仲のよい友に別れて琴をやめ

(三十六篇一德)

蘇村に「鏡汁の君よ我等よ子期伯牙」鬼貫に「伯牙ならで我も戀ふるぞ時鳥」がある、此種の句は何れも兄たり難し弟

たり難しで、今人好むで作るの要はないと思ふ、専ら歴史吟や小説の翻譯川柳にのみ没頭して居らるゝお方の、御意見が承つてみたい。

列子の湯問「伯牙善く琴を鼓す、鍾子期善く聽く、伯牙琴を鼓するに、志高山に在れば鍾子期曰く、善哉峨々として泰山の若しこ、志流水に在れば鍾子期曰く、善哉洋洋として江河の若しこ、伯牙の念ふ所は鍾子期必ず之を得」呂氏春秋に「鍾子期死して伯牙琴を破り絃を絶ち、終身復琴を鼓せず、以爲らく世に知音の者なしこ」

(二〇)四文一合文君もつきおほひ

蘇村の「轉や相如の絃の切るゝ時」は同じ故事をよむだもの、司馬相如傳に卓文君は蜀郡臨邛の富人卓王孫の女なり、新に寡して音を好む、司馬相如客こ其家に至る、酒酣にして琴を鼓し、琴心を以て之を挑ひ、文君心に悦んで之を好みし夜亡けて相如に奔る、相如與に馳せて成

都に歸る、家へ徒らに四壁立つのみ、王孫大に怒る、後ら臨邛に之き、盡く車騎を賣りて酒舎を買ひ文君をして壺に當らしめ、相如自ら犢鼻褌を著け、庸保を雑作し、器を市中に濼ぐ、王孫之を恥ぢ、文君に僅百人、錢百文を分與す、成都に歸り田宅を買ひ、富人となる、武帝子虛の賦を讀みて之を善しし、相如を召して郎と爲す、後ち拜して孝文園の令と爲す

(二)手をひらけ足をひらけ會子立ち會子名は參、字は子嬰、孔子より少き四十六、孝經は實に斯人の作。
論語泰伯篇に、會子疾有り、門弟子を召

道頓堀は言ふ

庄 萬 よ し

思想上田舎者

◆田舎から叔母さんを千日前へ連れて来るさま、キをさるさま首を伸ばし高島易斷で又一服看板からスリの捕まるまで右往左顧に半日もかゝつて歸つて来たたら足勞れて按摩賃が入つただけ。
◆器用である、才子であるさ自他共に任ずる

して曰く、予が足を啓け予が手を啓け、詩に云はく、戰々兢々として、深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し、今にして後吾れ免るゝことを知る夫、小子よ (附記) 鄭袖の狂句(五)に説きしが十六篇左滿の作。
鼻に袖おふへこいつてしくじらせ

あれき要するに斯る材料の句は判じ物式に陥り易し、(六)に「かつたいの窓で孔子のよまひごこ」を掲げたり何れより拾ひ書留め置きしか記憶なし十四篇にはかつたいの側で孔子のよまひごこあり、此句の説明に關聯する句の一

若人よ。趣味の町では一物を熱視せよ一物を研究せよ。一物に徹底せよ。思想上の田舎者となつて逍遙ふうち何物をも掘り得ず夕陽に面してゐる自分は春秋に富む柳友を羨望して且切に三省を乞ふ。

管 卷 き 二 三

◆悉く寫すは寫真であつて、摘寫するが繪である。悉く記述するのは三面記事であつて摘記するのが川柳詩である。
◆ごんな婦人からでも一つの美點を見出し

窓より其の手をさつてあかんなんし (四十三篇一秀)
此人にしてこのやまひあり軍師なり (二十三篇)
孔子の涙此の人の膝へおち (三十九篇)

三月號拙稿「雜感」に對し久良岐氏より次の御垂示あり「貴辭中、初節句魚木ニ上の景色あり、は謠曲の文句取なること云ふ迄もなければ、これは談林より川柳へ附加注入された趣味さ小子は存じ居申候、談林の句に、藤の花蝸木に上る風情あり、を記憶致し居申候」
——五月十一日狂犬豫防注射をなじ
囁りて認む、牡丹開く——

得る如くごんな事件からでも川柳味を摘み取れる。
◆徹底さいふのは趣味以外を切り捨てることである。この切り捨てる勇氣は集積するよりより以上の努力を要することを知らねばならぬ。
◆一つのことに徹底すれば他は推して知るこゝが出来ぬ。六ツかしい一事に徹底することである。

口語體の句

(續稿)

本號では常套用法の(三)を掲載する筈でしたが、前號發表の「半口語體の句」が組版の不注意で、途中からぶつ切れにされましたので、本號は、その落植殘稿の發表に止めることにいたしましたから不悪御諒恕を願ひます。(路郎生)

もう外に死に人なしか、さ腹を買ひ

(評)「死なぬかさ雪の夕べにさげてゆき」といふ美しい詩もあれ
ば「片棒をかつくゆうべの河豚仲間」といふ人世の悲哀詩もある
あんにしろ、鏢を放せ、庄屋分け

(評)口語の妙味、かくも自由にその境地を描く。「あんにしろ」
は「何んにしろ」の田舎訛。

花火を貰ひ日が暮れる、日が暮れる

(評)この句を讀むと、幼時のころの夏の夕べを回想せずにはあ
られぬ。私自身にも「日が暮れる日が暮れる」といふ經驗をもつて
ゐるのである。

今 の 句

こいなんや、亭主小鯛を裏返し 馬行

あ、彼女の事ですか、記者に逢ひ

小遣ひがあるか、云へばお辭儀をし

支那はさうなつた、鏢から棒の母

そこにあるが、草鞋のまゝで漬ひ

さ、お前の来た時分は、親且那

降つてきました、女房燭をつけ

この方は如何、傘屋バツミあけ

よく解りました、云ふ露路に住み

まあ、いゝさまあ、いゝ、眠むる

半口語體の句は、古句にも、現代の句にも、かなり見るべき

句が多い。ここにかゝけた句なきは、何れも面白いと思ふ。殊に

次に示すやうな郷土的な句に至つては、口語體でなければ到底

表現し得られない境地を擲んでゐると思ふ。

京極でお踏みやした、いひ募り

さ、さすか、さうやおへんに乗りすこし

次に私の句の「まあ、いゝさまあ、いゝ、眠むる」は半口語體

は云ひ條、頭の中で考へてゐる言葉であつて、齒から外へ漏れ

た口語ではないけれども、便宜上このころへ收めておいた。

本社五月例会

五月四日午後六時
於 日本橋俱樂部

本社例會を四日の午後六時から日本橋俱樂部に於て開催いたしました。東京から今朝歸阪された主幹路郎先生には旅の疲れを物こもせずトランクを携帶されたまゝで出席されました。定刻前から降り出した雨にもおそれず馳せ参じた熱心な柳士の面々戶外に雨の音を聞き乍ら心ゆくまゝ句作に耽りました。(二柳子記)

路郎、松郎、舞翠、松雨、ひろし、飯山、子行、乾坤、秀哉、泗水、文久、三平、三次、琴香、枝呂、茶の木、碧樓、突支坊、開路、春莊、文芳、霧太、かほろ、喜音坊、憲翠、利器、万よし、凡平、屏三呂、英豆、刀三、馬行、岡田、二柳子、(名簿より)

單衣着の綻び赤が少し見ゆ 憲翠
老人の單衣晝寝が續くなり 史朗
逢戻り單衣下背の口を出る 十字路
捨てられた兒にも單衣が着ると 山雨樓
病上り單衣に替つて蚊をいぶし 万よし
單衣着た母の猫首が目立つなり 枝呂
兄さんの單衣は薩摩武士に似て 春莊
ナフタリン臭い單衣を匂う着る 文芳
單衣物天神祭の柄を選び 眠聲
井戸替を寒う見てるる單衣物 長人
弾力をみせる單衣の重たく 茨豆
小包にはや母からの單衣もの 濁水
單衣着て木のめ一本買ふて来る かほろ

しつけ糸單衣の人を呼び戻し 三平
單衣着て是で借金なかりせば 飯山
單衣着て出を植り行、土間を降り 同
單衣着た帳さに桶け續くなり 屏三呂
單衣着て漸くおのが職を得る 同
二等車の荷物にならぬ單衣物 刀三
單衣からめつきりませた妾の子 同
單衣物に着替へ夫婦云ふ氣持 馬行
白叙傳の單衣の頃がまだ續き 同
單衣着て娘小さう膝を折り 開路
約束を破つて單衣はねを上け 同
挨拶の言葉も變る單衣なり 同
(人)女の子單衣喰ひつゝ着る 山雨樓
(地)御寮人折目正しく單衣で來 万よし

(天)信心に單衣の襟を合せたり 史朗
(軸)單衣着て家出に汽車が見ゆ 路郎
單衣もの風たんくく流れて來 同

長女 互選

馬鹿な話のこゝ長女は手を支ぬ 馬行
長女のゐる内日光も見て來る氣 文芳
母親とおなじ口を利く長女 春莊
母親の情は長女だけが知り 三次
諦めた長女へ優し婚が來る 喜音坊
冗談になるこゝ長女は俯向いて 屏三呂
一步譲つて長女のかしこさよ 憲翠
是が長女ですアハ、ご紹介し 松雨
貫はれて嫁、長女に兒が出來ず 三平
母の留守長女おさいが出來ず 萬よし
督促に長女始めて悩むなり 輝翠
欲しいのが長女の次に一人ゐる 泗水
長女ふきキリスト教の本を讀み 開路
許されぬ戀に長女の氣が強し 乾坤
我儘に育ち長女に恥多し 同
母親の惚氣を長女聞かされる かほろ
一幕を残して長女歸るなり 同
クローバー意味も掴む長女 史朗
わゝ長女ですこ肺癆科へ連れる 同
母に似て長女朝寢の癖があり 文久
刺煮着を付、長女のみめくし 同
髪を梳き乍ら長女は教わて居 飯山

當然のやうに長女は塗つてゐる 同

家中の誰もが長女嫌になり 霧太

妹へ譲つてやれぬ戀を持ち 同

つゝましくして、長女嫁き遅れ 碧樓

長女次女着物も同じ柄で縫ひ 同

母親の愚痴は長女へ持つて来る 枝呂

襦子襟が長女に似合ふ暮し向き 同

淋しさを持つ長女にて羨まれ 子行

貧しさの中に長女の智慧を借り 同

昔話に長女の水くさし 荻豆

長女、熊に捕られたこともきゝ 同

すき焼をさけて長女之母の膳 刀三

長女産んでそれから金が出来、 同

母と同じ病ひで長女死にたがり 松郎

いつか父を苦、相手を長女知り 同

母の帯長女の帯なりにけり 路郎

長女からすぐいやらしい父に、 同

代診をさん附けにし茶をすゝめ 松郎選

それ見ろこばかり代診恨まれる 文芳

代診の親許から西瓜が届き 馬行

氣輕さについて代診へ言ひすゝし 荻豆
屏三呂
代診ですまされてゐる暮しむき 憲翠
叮嚀に診るが代診取得にて 突支坊
代診の身を淋しがる日もあらむ 乾坤

代診へコツンと觸れる人が死に 霧太

代診を笑へば笑ふ心持 子行

代診は福座蒲團を遠慮せず 飯山

代診は臨機應變心得る 文久

詩集出す事を代診聞かされる 刀三

責任の程を代診知つて来る 同

代診を見送り笑ひ聲になり 史朗

代診の無口は頼りなくされて 同

代診のその氣輕さを貰つてやり 路郎

代診がみても癒らぬその病ひ 同

代診が引受けたまゝ夜が明ける 喜音坊

代診の眼に梳髪が意氣に見ゆ 同

代診は折目正しい背廣を着 同

(佳)代診を淋しくさせる診斷書 霧太

(佳)代診でしたのかご親類 飯山

(佳)代診はバツトきと立ち上り 路郎

大男 馬行選

小使にでも行かうかご大男 松郎

大男欠伸をするのを見上げられ ひろし

大男寄席で人から邪魔がられ 酒水

大男感傷的を笑はれる 乾坤
大男變て貰つて丙種なり 万よし
その世辭が巧く云へない大男 秀哉
大男君と呼ばれて振返り 屏三呂
大男女郎屋の庭の狭いこご 霧太

傘さしてゐる大男少し濡れ 春莊

大男或夜障子の影を見る 飯山

満員に網棚持つた大男 聞路

ごつちに似たのかご大男は聞、 松雨

網棚へちご世話をやく大男 輝翠

大男課長の椅子へ背を向け 史朗

大男自分が負けた聲ご知る 同

大男ちよつごの所も潜ぐる氣味 枝呂

叩かれてきよろ／＼して大男 同

大男相談をする柄でなし 子行

寢姿もたゞ罪がなし大男 同

大男笑つて居ればそれでよし 同

佳句

大男またその上に帽を着て 松郎

大男電話室から出にくがり かほろ

失職の頃を大男の悲哀 荻豆

大男改札口で横になり 茶の木

大男下足番から見上げられ 飯山

角帯の落ち附かぬまゝ大男 刀三

大男蠅の飛ぶのに逆はず 同

大男女房まかせの事多し 路郎
大男を母はこの子にしてしまひ 同
まんまるく吐かれてゐる大男 同
(軸)大男女が校まで知れ渡り 馬行
大男喧嘩したがる友を連れ 同

渡りつく蛙の足の長い事
 文 芳
 くられて居るごは知れず蛙浮き
 万よし
 提灯が蛙の聲の中を行き
 茶の木
 足音に飛んだ蛙の氣が揃ひ
 乾 坤
 反抗も無くて蛙は年を取り
 屏三呂
 ほろ酔を避けてるやうに蛙逃げ
 春 莊
 兒が去んだあごにちんばの蛙
 馬 行
 足音の後ろくで鳴く蛙
 碧 樓
 飛込んだ蛙に波の塵が揺れ
 同
 立話途切れたはなを飛ぶ蛙
 同
 里歸り今日なつかしくきく蛙
 同
 この心蛙あざけるばかりなり
 子 行
 蛙にも午後の陽差しが蒸し暑く
 同
 足さめて蛙流されさうになり
 枝 呂
 小さき流れに逆ふてく蛙
 同
 池の蛙見當つてもぐつて來
 莢 豆
 息をひそめた蛙に昔の葉の込み
 同
 二ヶ月になる病床へ蛙鳴き
 史 朗
 汗かいた車へ蛙鳴いてる
 同
 飛び込んだ蛙の足を漢がからみ
 かほろ
 蛙又めだかの群れを沈ませる
 同
 逢ひに行くに誰はどき鳴く蛙
 松 郎
 蛙鳴く夜を金が欲し金がほし
 同
 蛙にもいさまを告げて婚歸り
 同
 火事消けてもこの蛙の聲に成り
 飯 山

蛙なく村に觀音講の鉦同
 蛙今日飛び込むここに掛つて居同
 靴替ののすつかり暮れて蛙きく同
 刀 三
 狂人の家出へ蛙なき續け同
 蛙を踏むまいと神經衰弱同
 何を聞かんごする蛙のまなこ霧同
 産み捨て置く嬉しさを蛙見せ同
 太
 バスケットの重さへ蛙鳴きや同
 同
 飛んで見るやうに蛙の又も飛び路同
 郎
 親のあごを蛙ひよこく出る同
 同
 眼に映るものみな青し蛙の子同

川柳 神戶句會

四月十七日夕より

神戸万よしに於て

前號既記の通り四月十七日夕より神戸
 の拙店樓上に於て、川柳雜誌社神戸句會
 を開催しました。當日は怡も、川柳短冊
 を開催しました。当日は怡も、川柳短冊
 展覧會開催中にて、一入盛會を極めまし
 た。尚散會後、當日遠く和歌山から出席
 された堀口楓林氏歓迎懇親會を兼て
 有志十一人が別席に於て小宴を催しまし

た。尙當日は何かご不行届きの點を出席
 の皆さんにお詫いたします。(萬よし生)
 路郎、東洋鬼、紋太、溪花坊、飯山、清金
 子、露葉、郊村、楓林、久我鬼、梅雅、柳
 藍洞、左馬樂、草人、浦路、卜水、鉦鳴
 一笑、南大棒、一狂、隨帖、文久、莢豆
 馬行、刀三、霧太、文溪、岳靜、夢水、柳
 郷、素生、頼坊、夢一、松郎、番翁、むつ
 み、万よし(名簿より)
 整 列 (兼題) 松 郎 選
 整列をさすに世話方汗をかき 柿
 整列をした銃剣に陽があたり 久我鬼
 人間のやうに並んだセメン 樽 清公子
 整列へ校舎の屋根が少し見ぬ 南天棒
 整列が亂れメダカの影が逃げ 莢豆
 整列に反り返つてる模範兵 刀 三
 整列の肩へ助木影をする 一 狂
 整列のうしろの方は影にゐる 同
 整列へ村長ギョチない言葉 番翁
 整列を待たせ先生友に逢ひ 同
 かんじんの時に整列ちさくつれ 万よし
 整列のみんな違ふた心持 同
 整列がムカデのやうに歩き出し 東洋鬼
 「氣を附け」へ捕もな蝶が飛び 同
 整列へ馬鹿くしくも陽が當り 馬 行
 「雁一度整列させて涉らず 同
 整列のわが子はいちち端に立ち 路 郎

整列の中に胃散の匂ひがし

同

整列をすれば驛前狭うなり

整列にまだ砂埃りおさまらず

番號に整列一人つゝ動き

整列の生徒に店が暗くなり

整列は遅刻の這入る隙がなし

牛ちゝを配つ来たもならんで居

いつち端右へ習へに波をうう

行儀よく列んだものも大人見る

整列へはいつて遅刻荒い息

整列へバラソル向けて驛へ入り

やつこらささ皆整列へ立上り

命 紋 太 選

二三日命捨てるに思ひつめ

破れ物のような赤兒の命です

生きて行く命に暗い灯をさもし

倉の横命を捨てゝゐる二人

助かつた命が崖を匍ひ上り

もうそこへ見わた命を大事がり

ほめられた嫁の命の短かくて

町人の目には粗末にした命

馬鹿は馬鹿なりに命をおしん

窓あけて馬鹿さ命が怒鳴られて

朝露のさらりつゝそのいのち

おまへの命貰らつて何にする

命さへ有れば逢はれる旅に出る

命歴々突きこむ朝の金盃

命軽んずるのへ女惚れたがり

労働者今日の命を一つ持ち

いのちさへあればと思ふ仲居

(秀)これぎり炬燵と思ふ生

(軸)短命云はれたで生

雲 雲 雲

黒雲が自然を破るやうに

干物をかすめて雲の影は

忙しさを連れ潮湯と雲を

この町のひさこを雲暗く

旅馴れて来た眼に雲もたゞ

公園の廣さへ雲の影がさ

病人に春の日永の雲を見

低い雲道吹く風で行く

切れぬの雲に鶏呼びあつ

淋しくも雲が流れる一人

雲の下ばかり風船走つて

よい天気ちぎておいたやう

雲ばかり見て伯父の世話に

ステツキの先におかしく

(佳)ちぎれ雲ひこり蠟燭

(佳)商賣が大事と雲をち

(佳)雲の外映。川のうら

更けて軒店あらゝゝしめ

軒店のすけなく捨てたよ

軒店ではたらく父に逆ら

軒店に聞くこの邊存じ

軒店は土曜の夜に残され

軒店がだんゝ奥の部屋も

軒店は並べ終るさ火をお

雨一ツ二ツ軒店空を見

軒店を素見してたゞ遅

親類は種類して軒を借

軒店の番何處からか戻

軒店の曇さバラソルす

軒店の邪魔して馬力荷を

軒店のそのまゝ居れぬ

軒店の休み電燈丈け灯

軒店へはつりゝ来て買

軒店はおいぎを見せて

軒店の暇を子守の見

軒店の空鬱湯氣の中に

秋風のまだ軒店に蠅

電球をこつて軒店仕

軒店へまごもに橋の

軒店の眸に白足袋が

軒店の一人でもいゝ

軒店の女房添乳に去

軒店のまゝで五十に

軒店のまゝで五十に

文 久

飯 山

浦 路

一 狂

梅 雅

岳 靜

夢 水

左 馬

馬 樂

紋 太

一 契

同 素

同 生

同 帖

同 東

同 洋

同 鬼

同 刀

同 三

同 溪

同 花

同 坊

同 霧

同 太

同 松

同 路

明暗帖

井上刀三

○軽い穿ちや、諷刺、寸鐵殺人的な川柳は、少しくつを呑み込んだ人にならば誰にも易々作れる。そしてこの創作に何の苦しみもなければ、何の感激もない。それは桶屋が、たがをはめてゆくあの器用さに等しく、百姓が細いうねを小走りに人糞を萬遍なく振りかけてゆく熟練さに過ぎない。隣寸女工が無意識に攔んだ軸の一握りが、不圖すも一箱にふさわしい数であつたのと同じ事だ。

○これは或めしやでの一瞥だが、すつほんはうまいさか、白鷹はたまらないさか、何處は氣の利いたものを喰べさすさか、篋棒にしても判り切つた氣焔を上げてゐる淺間しい人間が居た。こんなのに諷刺めいた川柳の一つも作らせようものなら忽ちにして、新進作

家の塵を摩するであらう。日當りに甲羅を千す紙屑屋の狡猾な洒落が、もし我々の生命をさす川柳のテーマに優つてゐるとしたならば、我々は一體さうすればよいのか。

◇い、川柳を見てゐるに全生命を川柳に打ち込んでよいさへ感激するがこれに反してつまらない川柳を見る程悲哀を感じる事はない。實際誇張と技巧の厚化粧をした川柳を見る程不愉快な事はない。處女を失つた女の豐滿な姿體よりも、我々は矢張り桃の様な頬を持つた乙女の方がよさそうだ。

○萬人向きのする川柳は無難だ。商品をかきて云へば、割箸や、箸、草鞋等々の類であらう。其處には何等流行もなければ、季節もない。

○その反對に所謂なまの川柳には、なんさなく慌しさがある。ピシ／＼跳ねてゐる鯛が組板の上で鯛をはねられ

鮮かな刺身皿に變化する有様が眼に見ゆる様だ。

○或人は、人に解らぬ川柳を作るの愚を嗤ふ。ひゞりよがりの句を作る作者の大膽さに憎しみを覺ゆる。しかし作者には作者の人生觀があり、思想があり、哲學がある。それ等が川柳てふ濾過器によつて濾出された時、果して皆の皆までが首肯出來得る句が生れるだらうか。何かの暗示をその儘直ちに句にせんさする馳出し川柳家の場合は兎も角、素讀一遍、徒らにその句の是非を云々し、若しくは一人よがりの句だなんて勝手な推定を與へて一蹴する事は苦々しい限りである。

○選者もあながち、全智全能でない限り、そんな川柳を持つて行つても天眼鏡で見分ける様に、はつきり解決をつけられない事は充分領けるが、その選者が唯「判らないから」「類句があり

「位ゐの曖昧あいまいさで一句を軽く片付けてゆかくこすれば、蓋し柳界りゅうがいの痛恨つうこん事ことであり作者さくしやの災難さいなんであらう。そして今迄いままで選者せんしやのこうした冗漫せんまんな選句態度せんくたいたいによつて幾何いくわの名吟なめいが、闇やみから闇やみへ失うはれた事ことか幾何いくわの駄作ださくが活字かっしになつた事ことか。選えんも亦また恐おそるべきである。

○一度キユウを握にぎつた者ものは一生せうじゆう涯げん撞球つうきゅうの奇怪きがいな捕虜とろになつてしまふ。川柳かわりゅうも亦また一遍ぺんぱん作つくつたが最後さいご一生せうじゆう止とめられそうない。これは僕ぼく丈だけかも知しれないが川柳かわりゅうの美妙びめうな魅力みりきはその人ひとを飽あて返かへり川柳かわりゅう家かたらしめるのだ。

勸進帳

竹 錦 粧
馬 馬 軒
居 軒

◆一世一代

菊五郎きくごろうの勸進帳こんしんちやうを、御見物遊ごけんぶつあそびはされ、樂屋がくやに相話あひかたられし由よし、辨慶べんけい禮讚らいぜんの一ひとく

さがあつた事ことも存ぞんじます。自分じぶんは新聞しんぶんを見たのみのみ(六代目も野球等やきゅうとうはやめられた方がこの噂うわさを聞ききました)

◆金剛杖に立並ぶ噓

位ゐより推賞おうえい古句こくごがないのは、助六すけむす三對照さんたいしやうして面白おもしろい皮肉ひにくです。

先生せんせいも自分じぶんも勸進帳こんしんちやうの生一本なまほんぽん、随分ずいぶん古いものですナ、近くは扇屋あふぎやの座敷ざしき、喜雀きせき宛あての素通すうと、先生せんせい舞まひ、自分じぶん唄うたふ、いつ迄いつまでたつても、いゝ氣きな域いきにある事こと、自らみづか慰なぐさむるに足たりる、然しかも滿み更さら意義いぎない業わざでもありませんよ、實じつに悟さとられぬこそ、浮世うきよの川柳かわりゅう味あじです。

富士子ふじこ女史にょしより最近さいきんの創作そうさく「温泉宿おんせんじゆくの人々ひと々」を惠めぐりました。——一節いちせつ——暫しばらくくしてからら(齋藤さいとう醫學士いがくしの事こと)に呼よばれて、其處そこへ出でていつた光代みつよは

場所ばしょ柄へいに似に合あひぬ羽織袴はおりんぼに威儀いぎを正ただした客きやくの姿すがたが、一寸いちじゆん意外いがいに思おもひた。I さんIさんは小柄こていな體ていをキチンミ端坐たんざして

少し血色しやくしきの悪い顔かほにキツト正面せうめんを切きつて、キビくくした調子てうしで話はなす人ひとである。——「I 氏は川柳かわりゅうの達人たつじんにて久良岐氏くらぎし親交しんかうあり號ごうを竹馬たけうまミ申まうされ候さうら」とあつた。A さんAさん(青柳あおやなぎ有美氏ありみしの事こと)の手紙てがみを思おもひ出した。

——I さんは毎冬まいとう持病ぢびやうの喘息ぜんそくに悩なやまされて困こる三ゆう事こと、A さんAさんから靜しず坐ざを勸すすめられて昨年さくねんから獨修どくしゆ中ちゆうだけれど、さうもうまく行いかぬ事ことなごを細こまかく話はなされた後のちで、お手ての物ものの川柳かわりゅう談だんやら、面白おもしろいチヨンガチヨンガの話はなしなごを羞はづさめた顔かほに似に合あはぬ、熱あつのある調子てうしでもても巧たくまに話はなされる。其合あひあひの手てには繰返くりかへしく此處こゝの眺望てうぼうの佳よい事ことをほめてゐた——I さんは夫人ふじんを連れもて矢張やが此近こゝくに滞在たざいされ居ゐられるのであつた(中略)

「わい今度こんどは私が一つ勸進帳こんしんちやうを御紹ごせう介かい致ちしましょう。さうぞ絃げんをお願ねがひ

致します」ミ、Iさんは光代の方をみて大きく出る。

「あらおよしなさいましよ、勸進帳なんて飛んでもない」ミ肩を擧める奥さんの抗議なきには眼も呉れずに「さあ、さうぞ奥さん」ミ催促する

「Iさんは丹田に力をこめて、諺が、りに中々底力のある聲で唄出した、唄出したは好いけれど何だか恐しく弾き慣い、何とゆるゆるとした唄ひ方なのだろう、川柳をやる人の長唄といふものは、こう云ふものなのかも知れぬミ考へ乍ら後を振返つては待合せ。なるべく氣を長く持つてボツン／＼ミ弾いてゆく——」判

官御手ををりたまひ」迄くるミ、さうしたのかIさんの壯重な聲はバツタリ停つて仕舞つた。さうものろい／＼ミ思つてゐるが、さう／＼故障

が起きたのか知らミ思つてゐるミ「わ、去年の秋から今年の正月迄かゝりまして此處まで覺わたのです、

私の勸進帳は之で終ります」ミ、云つてIさんは澄ましてゐる。そら御覽なさいミ云はん許りの奥さんの眼の光り——唄ひくたびれ話し疲れてしまふミ、され一風呂ミ連立つてぎやく／＼ミ降りて行く。(後略)

「江戸から東京へ」の著者、矢田挿雲氏の評
△I氏登場して生彩變々すぐ二三行間にさんがハツキリした。
△歡宴管にして行届けり矢張りIさんの勸進帳生動せり。

自分唯一の隠さず藝も、一世一代の大面目をほこしたわけ、これも川柳ミ知己のお蔭ミ、ロウソク一丁上げました。そう／＼先生にもいつか一度だけ少しほめられた事がありましたたネーな

ミ氣隨氣儘な悦に入る。(省)

腹藝

吾人の九代目團十郎の勸進帳を拜崇し日常ヤヤもすれば、その假色を使ひ、勸進帳を踊るのは、何かさいふのに、

その創見に係る「腹藝」ミいふ點にあるのである。

「腹藝ミは何ぞや」ミ、質問するものは、絶對的に腹藝のわからぬものである。腹藝ミは科學を一步超越した直覺であつて、十の物を六ツか七ツか説明し、若しくは説明を絶對に附加せずして、インスピレーションの感應で、説明するものなればなり。

吾人の川柳に對する態度も一元的に、この腹藝を用ひつつあるなり、此の腹藝の理解せざる徒を、江戸ッ子は唐變木ミは申す也。(辭岐)

作家と自選

塚崎松郎

何かの機會に川柳に手を染めた以上我々は、よく一家を成して起つまいふ意氣のももに、その唯一の作品の完成へミ努力を續けなければ何等の意義がなくなる。自己の作品が完成の域に達し、一家を成すには餘程の修養ミ、研

續つづきが必要ひつやうである。よし折角せつかく作品さくひんの完成せいせいに近づいたとしても、完全ぜんぜんなる「自選じせん」を行ひ得る域ちかに達せねば一家いけを成し得ないと思ふ。切角せきかく佳よい句くを作つても、自選じせんの眼識がんしきに乏たしい爲ためにこれを自ら棄つて了つて拙ちやくい句くの方かたを發表はつぱつしたりしてあたり磨ひき揚あげた手腕しやうべんを臺たい無しにしてしまひ、終つひに柳壇りゅうだんの下積したせきに甘んぜねばならない事ことになる。また何時いつ迄も選者せんしやを頼たのりにしつゝしてのみ居て、作りつばなしを選者せんしやへ送り、没句ぼつくを他に投句たうくしたりする選者せんしやへの非禮へいらいを續けてゐる。こんな人達ひとたちは何時いつ迄經つても句くの向上こうじやうなきは及びもつかず、熱心ねつしんな後輩こうはいにぎん／＼追抜おひかれて行きつゝも尙なほ超然ちやうぜんとしておさまつてゐるなき實じつに氣きの毒どくでならぬ。恐ろしいものは「自選じせん」の優劣ゆうりやくではある。

「我々われらは何日いつ迄も選者せんしやの勢せきを頼たのはして許りであつてはならない。我々われらの信頼しんらいしつゝある選者せんしやは、何日いつ迄も我々われらの側かたに在らず。作品さくひんの完成せいせいに伴ともじて、やが

ては一人立ちひとりたちなる秋あきに會あひして、平素へいそ洗練せんれんせる確固かくこたる自選じせんの益々いよく一貫いっくわんせる自己じこの作品さくひんを發表はつぱつし得べき常に用意よういなかるべからず」てう信念しんねんは私の頭あたまよりはなれない。

「完全ぜんぜんなる自選じせん」は理想りやうきやうにしても、私等わたくしらは之これに近い自選じせんを行ひ得る迄までに達する努力どりふに腐心ふしんしたのである。それには先づ、よく他人たにんの句くを觀み、而して自己じこの作品さくひんの缺點てきけんを見出し得てこそ作句さくく向上こうじやうの研究けんぎゆさもなり延ひひては自然的じぜんてき「自選じせん」さいふ點てんに確信かくしんがついて來はしないかと思ふのである。私は斯かふした見地けんちから他人たにんの句くを玩味わんみするさいふ事を諸君しよきんと共に心掛こころかけたいと思ふ。餘程あまの天才てんさいでない限り自己じこの句くのみ觀みてゐるにそこにあるデレンマに墜入たいていつて大變たいへん作句さくく向上こうじやうを阻害そごされ易い。それでさうしても他人たにんの句くをよく味讀あじしてそれ／＼の佳よい點てんを見出し、それより得る所とのある刺戟しやくげきに接あはしたいのである。さいつても他人たにんの句くの佳所よところを模倣もほうする

意味いみではない(模倣もほうは大の禁物きんぶつである)換言くわんげんすれば私等わたくしらは何時いつも他人たにんの創作さくしやく中に必ず「うまく詠よんである」を感かずる句くを思おもひ出す筈はずである。そこで、その感かじた句くには想おもひや修辭しゆじや調子てうし等の點てんに特に感かじるものが私等わたくしらの作句さくく向上こうじやうに唯一ゆいの刺戟しやくげきとなつて受入れなくてはならぬのである。そして其刺戟しやくげきを一つの標的ひょうてきとしてより以上の獨創どくさうな句くを作るに努めたいと思ふのである。我々われらは、創作さくしやくに勵む一面いっぺんに、この他人たにんの句くを味讀あじするさいふ事ことの一致いっしによつて生きなければならぬであらう。尙不可解なほかかな句くに接した時は手近てみぢな人達ひとたちに示して批評ひひつし合つては何物なにものかを發見はつけんしたのである。昔むかしから他人たにんの句くを觀みるに云ふ事を餘り欲ほしくない人達ひとたちが相當たうがうにある。偶たま觀みるにしてもよく玩味わんみせず外ぐわい観かんより映うつるある缺點てきけんのみを指摘しゆさして非難ひなんし甚だしきは初心者しんしやくしやの前まへでそれを嘲笑てうしやくする事を痛快てうがいしてゐる人達ひとたちをよく見受けらる。自己じこに不忠實ふちゆうじつな川柳家せんりやうかではないだ

らうか。

本誌の主幹路郎氏は句評等の時によく「句は最も親切に見ねばならぬ」と例を揚げては我々に注意される句を親切に見るさいふ事は一つには浅薄な觀方が反つて作者に對する禮を缺ぎ一つにはよい意味の自己發見をも得られない云つた先聲としての温かい言葉だ。私は解してそれ以來大いに教へられ得るころがあつた同人の霞乃さん、莢豆さんなどは最も親切に句を觀る側の人である。兩氏共々深刻な批評者であるが、一面また餘りに買被つてはしないかと思はれる批評をされる事がある程で、これは兩氏の天性かも知れぬが時に我々が否定した句でもその句の幾分でもある佳所を觀出するに努め決して全否定は餘程の句でない限りしない方で、其他句に限らず人物や事の批評等に於ても善意へ善意へ解して行くといつた、非常に温かい性の持主である。これ等の點にも私は始終教へ

られてゐる。繰返して云ふやうだが要は他人の句をよく味讀する事は右に述べたやうに自己作品の完成に併せて自選の素養を造ることであり眞面目なる川柳家の自己に忠實なるこゝの證左ではなからうか

新戎橋より

万よし生

頭と腕

◆東海道を通つた旅客は廣重三十返舎までではなかつたが、五十三次は廣重三十返舎に獨占せられて仕舞つた

◆A公といふ近所に住む按摩は三十過ぎての獨身の稼ぎ手、揉み取つた高が萬以上銀行でうなつてゐる。曰く「道頓堀には金が落ちてるに皆が拾はないのだ」

◆人の住む里、そこにも此處にも川柳は轉がつてゐるのに拾はないのだ。併し拾ふには廣重、十返舎の頭、A公の腕を要する。

柳友よ。頭を練れ腕を磨け。川柳は嬉々として安田の利子の如く諸君へ到り天華の奇術の如く諸君の手から光を放つ

四ツ辻

◆四ツ辻に立つこ何の方へも行けさうに見へるが、今行けるのは只一すじ行かねばならぬのは只一筋である。

◆青春氣鋭行くとして可ならざるなき氣概、愛すべきものあれども、危機は足下に横はるこに氣を付けねばならぬ。

◆眞實進まれる道は君の歩一步の足跡であり、完全に體驗し得るは君の立つてゐる周圍のみであり、結局後世に残るのは今燃焼の一句一句の外にはないのである。

佛説に曰く「汝の立つ處即ち是道場なり。」

川柳家戸籍調べ募集

字數二百字以内本號戸籍調べの項参照投稿は本社事務所宛のこゝ

川柳書架 [十八]

誹風柳樽全集

▲柳樽の活字本としては尤も多くを採録しあり。その「緒言」を抜く。

文政年間小石川養生所の肝煎なりし小川又右衛門顯道は、もご醫家なれど政道にも用意ありし者なり。其隨筆「塵塚談」において川柳點の狂句を論じて曰く、俳諧に武玉川、前句附に柳樽といふ雙紙あり。人の舉動、心のよしあし、尊卑の人情、上下の人心の有様、其外世の中の事情をされ句にいへるものなり。されどなぞの類に似たる事ありて、早速は解しがたき事多くあり。奉行頭人は人の邪正、事變人情を辨知する事事務なれば、此の雙紙の句ごもすらくご解す人をよしとすべし云々云へりしは、能く其の當時の奉行頭人の情弊を察したる言といふべし。今も猶、裁判官警察官なきの中に、まれまれには世情人情に疎く、ただむな

しく法文になつみて苛酷に失するやうの憾なしとはいふべからず。事態は文政文化の頃さいたく變りたれど、人情はさして異なることなし。人事詩なき立派なる稱を得て、今日盛んに川柳點風の狂句の行なはるゝは、なまじいの俳句倒よりは興ありてまた益ありといふべし。左れご此の狂句も、下女ご居候を當の敵ごしてより卑猥に傾むき、穿ちご隠し題に凝りては誠に謎のごごまたあて物のごごくなり、有のまゝ過ぎては言葉をなさぬ程に下りたるは愴くべき事にて、柳樽も初代川柳點の頃は、居候を詠みても「物にかゝりが筆粟の稽古する一杯ご上品なり父兄の勘當をうけて他家によるを、掛り人または物にかゝりごいひしにて、筆策を吹くなごの體、其人物を顯して、父兄も勘當すべく、またこれを同居さする者の迷惑の情も察せられたり。これが居候

ご改名するご共に、同居人を侮辱するごご其極に達し、下女ご居候より、狂句を見るごご仇敵の如くなりしは、をかしくもまた氣の毒の事なり。又バレ句あるひは大尾ご唱へて、只管をかき事を云はんご争ひて猥雜を極めたる事は此道の外道惡魔にて、それが爲に川柳點の品位を墜し、狂句なき士君子のもてあつかふ者に非ずごまで斥けられたり。これらの弊を刈り除き、川柳點の旨ごする、人情の微、世態の細を穿ち、今の世の養生所施藥院の肝煎なる小川顯道其人のごごき具眼者に玩味せられたきものなり。元祿寶永前句付盛んの頃「傾城にするごて親は産み付す」ごいふ付句は、ごの宗匠も一度はほめられしごか「孝行のしたい時分に親はなし」なごは、子養はんごすれば親いままさずの古語其まゝの如くなれど、したい時分ごいふに無量の妙味あり。前句によらぬ一句立の狂句は、人々平常心におもひて、いまだ云出さざるごころをさらへて、其まゝにいふが手柄なり。小川顯道はすらくご解す人ご云ひしが、其の當時にありては、世情に通じたる者には、すらくごも解されしならんが、

募

集

句

犬

蛭子省 二選

お妾の留守小犬に藝を強ひ 太洋
 お隣りの犬を預かる未亡人 柳一
 郊外へ引越してから犬を飼ひ 三次
 吠わかゝる犬を産無僧一寸見る 夢坊
 保険屋は犬に妄想を云つてゆき 拔天
 留守番の犬に嬉しく迎はられ 逸錢
 吠はられて思はず掃る男の手 深春
 老犬がゆつたり坐る門構へ 光路
 喰ひ飽きた犬日常りへ来て眠り 白鷗
 未亡人狎を二匹も飼つて居る 天魂
 番頭はもう犬なきに逆はず 眠聲
 電車までついて来た犬吠はて。 眞沙哉
 洋服の寄附に吠わつく村の犬 残紅
 お隣の犬を小聲で叱つて居 突支坊
 洋服へ小犬こわん、吠はるなり 柳秀
 書生より贅澤さうな犬が出る 早苗
 犬の聲女中女關に畏こまり 志郎
 未亡人狎ころまでも羨まれ 芳香子
 お隣の犬を叫んでる残りもの 憲翠
 嬉しさをはつきり犬は尾に示し 柳也

さん付にされて無聊なめすの狎 白蝶
 食ひ残り貰ふに犬は藝をする 琴香
 自轉車の丁雅は犬を横切つて 濱波
 立話不意に小犬に吠わつかれ 郊村
 尾を振つてひよこも出た暮の犬 茨豆
 小賢しくセツター二匹寫つてる 杏三
 掌にのせて小犬を貰つて來 無心
 畏こまる犬に子供は石を投げ 千代二
 番犬は後家と淋しく今日も寝れ 冷笑
 瘦せはせぬかま犬を抱く旅歸り 万よし
 交番所さいの餘りを犬にやり 聞路
 女關の犬に馴れてる 出前持 同
 土佐犬を飼はるほかに顔が賣れ 馬行
 妻楊子尾を振る犬へ足を出し 同
 うちの犬に似た犬を見て歸り 松郎
 別荘の犬が走る鈴が鳴り 同
 今朝も晴切まで尾いて来た犬 同
 共稼ぎ犬にも曳かす田舎道 山月
 女房がつけた名前犬を飼ひ 史朗

今にして柳樽を讀みては、なかくすら
 〳〵ころにあらず、明治前後の隔ての
 關門、守り厳しく、手形免狀鶏のそら音
 左様な事にて通り難し。我等も二十餘年
 のわかし、大久保紫香氏のものに會し、
 一人一枚通解し得る者は功の座に直して
 酒盛る事をして遊びしが、なかく、難關
 苦戦にて、果は曲解のみ多くして、一人
 半枚に願ひ下けたる事もありけり。傳へ
 ていふ一天人が小田原町をのぞいて店
 さいふ句を宗匠解しかね、一夜考へ通し
 ても考へ得ず、我も立机して判者たるに、
 此句が分からぬ事ありては面目なし。此
 上は神佛の利生によらんものさ、淺草の
 觀世音に參詣し、祈念をこめて立歸らん
 として、不圖上を仰ぎ見てハタタ手を打
 ち、これ目前の御利生と悦びしをか。作
 り事なるや知らねき、まことに手近さう
 に見えて、俗判じかねる句のなかく、に
 多し。これを解し得て興味あるのみなら
 ず、江戸の風俗を曉り知る事につきて大
 に益あり。此の川柳には木卯の名を以て
 判者の側にも立ちし柳亭種彦は、古俳諧
 に依て慶長より元祿頃の風俗を研究した
 るが、今は柳樽によりて寶曆天明より文

幼稚園時刻に犬がつきまこひ
階切で犬の首輪を堅く持ち
夜逃げごは判らぬ犬が尾を來る

煙

恩給も足らず煙のやうに逝き
父を真似鼻から煙出して咽せ
物干へ煙の見ゆる二階借
大阪の煙を逃けて文化村
工場も縮る煙の色になり
泣き止んで女煙をみつめてる
火葬場の小雨煙が低う這ひ
軒をはう煙に起きてるるご知り
世間並に文化村でも煙が立ち
生きてる煙に山家見付けられ
線香の煙きれいに罪を消し
夕空へ煙いろく立ち上り
煙だけ残して通過驛の晝
工場地煙に叫んで煙に暮れ
夕飯の煙がたなびく村もすぎ
もう晝の煙を長屋皆んな立て
煙突の一本高い田舎道
むら雀煙の中を通りぬけ
たのまれた飯に煙のひぎいこ
二筋の煙ねじれて舞ひ上り
北風に煙は汽車の先になり

其象
三次
逸錢

康繁
志郎
早苗
案山子
眞沙哉
黙太
白鷗
柳一
太洋
逸錢
眠聲
隨帖
拔天
琴香
千代二
憲翠
瀟波生
郊村
其象
白蝶
史期

若婦夫も混つた暮し向き
土佐犬を連れて書生の散歩なり
(軸女ご別れるかぎに犬がゐる)

麻生葭乃選

大阪の煙山からきたながり
揚るだけ上つて煙おりて來ず
見送りが煙を溶びてりあける
輪にふいた煙に頭下けてるる
煙突に煙を上げぬモメが出来
憧れの都に煙多過ぎる
父親が炊く煙が立退かず
煙吐く工場に無事な日が續き
六甲から浪華は煙ばかりなり
煙幾筋夜の更けるのを知り部屋
煙横に流るゝ河岸で逢ふてるる
六地藏の線香春の陽の中を
何ご思つたかはひまはる煙
阿蘇の煙なき白蓮の夢に入り
船世帯細ほそ雨に煙を立て
自由晝の旗を煙に違ふ風
畑から我家の煙細う見る
二階借以下の煙に窓を開け
産湯から以來煙のつゞくこ
鼻の煙に理智のつきはじめ
煙にはなれ浪花踊の幕が明る

黙太
千鳥
省二

山月
柳秀
残紅
深春
突支坊
無心
山雨樓
三次
万よし
馬行
同
莢豆
同
美の作
同
聞路
同
同
松郎

政文化度の江戸の風俗を研究考證すべし
たしかに研究考證の科目ごもすべき價
あるものなり。

此篇柳樹初篇より六十篇までを集め、これ
を分ちて二冊となしぬ。甚だしく卑猥な
る句を削り去り、落丁また板木磨滅のもの
ころは異本を以て補へり。これが校訂に
つき岡田法學士、和田文學博士の藏本を借
覽して犬に益を得たれば、こゝに附記し
て謝意を表す。

櫻庭篁村識

▲本全集は大正十三年十月五日合印刷同
十日發行。菊版四七八頁。定價七圓。發
行所は東京市麴町區山元町三丁目四番地
國書刊行會。
▲本全集は曾て明治四十四年に國書刊行
會から發行された近世文藝叢書第八及第九
の合本である。川柳の愛好者、研究者
必携の書である。

杏林川柳

第一輯 第二輯

(佐瀬世外編)

▲第一輯の「はしがき」を例によつてかゝ
けて見やう。

拗ねて自ら世に外れし世外も、未だ婆
婆に未練の心残りて、所謂俗學目に映り

人
自由書は氣持良い程煙をはき
燒場の煙り遺族癡てるる
わが部屋へ煙を吐いて息子來る
柳也
松郎
馬行
地

煙突に息もつかせず吹きちぎり
下肥屋香をくべるへ苦笑ひ
出世してゆくやうに煙たちの
天
美の作
松郎

暑中見舞の廣告を募る

▼奮て申込まれたし▲

一口金五拾錢(二頁の十)

幾口でも申込んで下さい。
一頁希望の方に限り金五圓一口分の原稿はなるべく簡單にお願いいたします。
廣告料は前金のこさ

◇申込期限七月十日迄(八月號)

大阪市港區八條通丁目十一番地

川柳雜誌社事務所

振替大阪七五〇五〇番

三〇

耳に響きて靜かなる能はず常に之を詩に移し歌に嫁して、自ら慰むること久矣。就中川柳はよく世の臟腑を發き、よく人の膽玉を刺るに妙あるを以て、拗ねたる世外は特に之を愛す。故に同じ他の拗ね者等と共に蒐集したるもの積みて既に數萬句、中に杏林に關するもの亦た甚だ多し。會々門下方月等醫書專營の朝陽堂主を伴ひ來りて、之が部分公刊をものせんことを勸む。世外固より蠶業に委するを好むものにあらざれば、直ちに諾して茲に第一輯を編むことなしぬ。

▲明治四十五年六月廿五日發行。三五版一二〇頁(但一〇五頁以後は附録笑話正價金拾八錢編者佐瀨文哉。發行所東京市本郷區龍岡町三六番地朝陽堂。

▲第二輯の「はしがき」
われ愛に杏林川柳第一輯を編みて意外の好評を博し：たるや否やは知らざれども、書肆より頼りに第二輯の勤めあるを見れば、勢ひ自惚れざるを得ざるなり。されば言下に之が承諾を與へず存再茲に二歳、暫らく勿體ぶりたるも、ぶり切れぬは懐ろの都合なり。依つて此の懐ろに相談の上勤めに任せて第二輯を編みぬ。

大正三年三月編者
▲大正三年四月三日發行。菊半截一二〇頁。正價金貳拾錢
▲杏林に關する句のみを蒐めたのが珍らしいから川柳書架に一冊載せて見たが、狂句多し。藏書家のめさし位にはなるかも知れない。再讀の價値なし。

人形へつれなくそびく水ほうそ 同

◇万よし偶會(五月六日) 万よし報

セルを着る頃、女房のヒステリー 山雨樓

セルを着たナボむざくごあ。 同

千日前セルにかはつた人出なり 同

嫁が返着てゐたセルを出て着る 花影子

セルを着た下。寒出毛ジャツ 弓磨

さこへでもセルの一点張りも出る 菊之助

逢曳のセルち寒く夜が更ける 万よし

母親は黄色のセルにつぎを當て 同

◇安治川小集(五月十日夜) 飯山報

涼臺毎晩同じさここにおき 白砂

珍客にうごんを喰はず暮し向 越浪

お隣ももう出す時分涼み臺 同

錢入れて宿直室にうごん鉢 一文字

二杯目のうごんの汁はあまる。 同

涼み臺猫も一緒に連れ出され 同

お隣の人でしまへぬ涼臺 同

誰にさもなく會釋して涼み臺 同

うごん屋で立替ておく錢を持ち 飯山

うごん屋の床子供に高すぎる 同

うごん屋で黙々さして飲んで。 同

汗拭いてゐるへうごん屋も置き 同

出戻りが片付けてゐる涼み臺 同

藤縁してポツチンさ。涼み臺 同

◇眠聲居小集(五月十二日) 眠聲報

地下室の電気は晝も點つて居 案山子

御供養を並べて乞食寢なり 同

敵の目を乞食さなつて澄りぬけ 同

腕に手をあてゝあんな人で。 同

電燈がうるんで見ゆる戀をする 冷

外燈は夜明けの街に眠むたさう 同

新鮮な空氣胸一ほいの窓 同

外燈を八魂然さ見て歸り 鮎

起きもせず起されもせぬ乞食。 同

合格の壯丁胸の廣いこ。 同

花の下この乞食は又貰ひ 眠聲

お彼岸の明日も日和さ乞食寢る 同

電燈の下の錦紗に包む戀 同

電氣の灯料に母の寝顔なり 同

リスリンは送。看護婦國を發ち 同

◇萬よし鼎座吟(五月十三日) 萬よし報

不平先に出されなだめる方に。 馬行

不平いつか癖になつて藏の隅 同

晝休みの日向に不平圓くなり 同

不平云ひさうなる顔を軒事讀み 同

氣の弱い友が不平を聞き飽きる 同

物云はぬ馬の四足のほき折れ 霧

くさくさして八ツ手へ水を。 太

云ひ足りぬさきに指輪をすべ針 同

不平ある鼠夜通し響るなり 萬よし

君の不平は小さいのださつ。 同

人前で不平云ふのは認れたうち 同

- (一)皆川幸次郎(二)羊白(三)なし(四)京都市堺町高辻下ル(五)明治廿八年十二月十三日(六)友儂業(七)軽味の句より深刻な句(八)ケバクした姿でなくすつきりした明るい感じの女(九)尊さは貧しき者の土に生き(一〇)旅行、活動寫真、野球(一一)有ります、子供も男が一人(一二)きざな人間と蜘蛛(一三)大正五年の春より

(83) 松本助六

- (一)松本京藏(二)助六(三)なし(四)大阪市住吉區平野梅ヶ枝町五丁目三四(五)明治廿四年十一月三日生(六)織工業(七)澤山あります(八)女の様になつてきた女(九)製作中(一〇)魚釣(一一)有(一二)別にあける程のものなし(一三)大正十年四月。

(84) 大山一狂

- (一)大山百次(二)一狂(三)竹郎(四)神戸市荒出町三丁目四五ノ一二(五)明治四十一年二月十四日生(六)下級銀行員(七)「女房は大きいやうで相き兼ね」契柳(八)藝者肌の艶っぽい女(九)まだありません(一〇)ピンポン、テニス、皆自信あり(一一)無(一二)酒を飲まぬ人(一三)大正十三年正月。

(85) 東谷閑路

◇柳路居偶會 (五月十六日)

東京 柳路 報

大阪の皆様はお變りありませんか。久し振りで何かの機會に二三日でも大阪へ行つて、かしい皆さんの顔を見たいと思つておきます。此間はお京された路郎先生のお顔を拜見して嬉しう思ひました。駒人君が上京して訪れて呉れましたので、對座吟をやりました。(柳路)

商用で上京しました。昨夜は柳路兄と柳樟寺の柳壇會に出席しました。飯花坊先生は東北へ旅行中にてお目にかゝりませんでした。當夜は柳路兄の宅に一泊していろく話しました。今夜の終列車で歸道します。五月十七日駒人

煩悶

煩悶の美しく見る 夏みかん 柳路
煩悶の眼をくむつてもあらは 同 柳路
煩悶の二人此世をくらく見る 同 柳路
人知れず煩悶をする姉となり 同 柳路

結局

結局は女將の前に手を台はせ 駒人
持參金結局包みが残るだけ 同 柳路
やうやうの事に馬券を一つ買ひ 同 柳路
結局は妻三郎を見て歸り 同 柳路
結局は手切金からもめが出来 同 柳路

◇万よし川柳 (第廿五回)

初對面 食満南北氏選

初對面さいふ可なり内容のある題をどうも月並にしてしまつてゐる惜しいと思ふ。

選句

初對面案外あたまた下けられる 万よし
(評) 案外さいふ二字だけの働きかと思ふ君でしかかこくだけで初對面 岡出清
(評) 同じ想はあるがいひ廻しを頂戴したわけだ。

初對面支那の話になつて行き 山雨樓
(評) なつて行きさいふで話の内容がよく解り初對面の人物も出てゐるいゝ方の部か。

この人がどうかと思ふ初對面 しつ子
(評) 如何にも初めて逢つたらしくていゝと思ふしかしそれだけである。

初對面子供同士はもう遊び 左馬樂
(評) 同じやうな句はあるだらうがこれもまわく中であつてゐるから。 憲 翠
初對面同士に見ぬ氣のかるさ

初對面誌上で長い馴染なり 柿 郷
(評) こんな事は誰でも言へるだらうが類句が少なかつたからさつて見た。

名に顔の感じが違ふ 初對面 柿 郷
(評) まさしく初對面らしい。

初對面くだけて出たへ言ひそ 屏 二呂
(評) いびそびれる事件の内容が稍々うかゞはれる。

口酒がのめるさか酔ふて来るさかいふのはあまりに多い。初對面さいふ事をもつとばかり頼まなければならぬと思ふ。若し秀句といふやうなものを極めるなら僕は支那の話さる。

次回題「植木鉢」五句 塚崎松郎氏選
六月二十日締切
大阪市南區新戎橋南詰角万よし宛

(一) 東谷菊次郎 (二) 聞路 (三) 時折都合のよい名を使用します (四) 大阪市北區旅籠町三三三藤繩方 (五) 明治三十七年九月廿日京都産 (六) 吳服店員 (七) 澤山あつて書く事が出来ません (八) 東髪で聽明な眼、中背で白粉をあまり塗らぬ女 (九) 活字になるまで、活字になるご自信がなくなります (一〇) 是ご云ふ趣味はありませんが二三の蒐集、日本物映講、旅行 (一一) なし (一二) 蛇、迷信、曇つた日、にがい顔、カフエーの女、力を出す事 (一三) 大正十三年の秋頃より大阪日日柳壇に投句しました句會は十四年四月堀井花童子歓迎句會が初めてです。

(86) 西垣 松雨

(一) 西垣覺三 (二) 松雨 (三) 物外 (四) 大阪市東淀川區南濱町一九四 (五) 明治二十四年一月四日午前一時二分 (六) 齒科醫療機械 (七) 澤山ありますので書き切れません (八) 垢抜けのした口合の一つも云へる女 (九) まだ是さいふものがあります (一〇) 喜劇、滑稽萬歳、小鳥、珍品第 (一一) 有、さうすれば子供が出来るかご研究既に八年 (一二) 女郎虫の臭、南京虫 (一三) 大正拾年頃番傘さ云ふ雜誌を讀んで面白相なものだと思つたのが始まり。

柳談會に列席して

黒木 莢 豆

九日の午後一時から第三回目の柳談會が、鳴尾の暹日荘でひらかれた。集まるもの十一、机を圍んで談笑するにふさはしい人かづだつた。大阪から二柳子、馬行、萬よし、松郎、刀三、神戸から紋太新顔の霧太、眠聲の諸氏が列席され、西宮から私、主人役の

主幹と奥さん(曹乃女)まである。

主幹が再度上京されたので、その土産話が持ち出されたりして、晝間は雑談にすぎはつたさうである。私はすこし出席がおくれたので詳釋しかねるが、三太郎、兩吉、小阿彌、飴ン坊、太郎丸、雀郎、柳路、雅樂王、東魚、信子、劍花坊の諸氏やその他の人々との交遊が親しみ

深い氣持ちで語られたのでなんきなく嬉しい氣分に誘はれていつたさうである。主幹の文藝談もいつもこの雑談の裡に語られて、いろ／＼なヒントを暗示される

ことが多い。ここに遠慮のない相互批評や句の生れた實際の動機が句主の口から赤裸々に語られることなきは、吾々の作句精進の上にもたらすものが多い。この間も美の作さんに會つたら、柳談會の一部の時間を割いて山の話さか、寫眞の話さか、廣告の話なきでも、文藝さかなり離れたものでもかまはないから、専門家の研究談を聴くことにははざうかさいふ話があつたが、私はよいことだと思つた。こまれば柳談會は漸次充實して行つてこの種の研究機關として權威あるものにしたいたいとあれもがねがつてゐる。皆さんも奮つて出席されて、忌憚なき研究談をきかせて戴きたいものである。電燈が點つてから『悲哀』といふ題で作句した。雑談に身が入りすぎたせいか

題が漫然としてゐるためか、さうも、たれもが作りにくいやうすであつた。椽側の手摺によりかゝつて、しきりに頭をひねくつてゐる馬行のリンゴ色の頬べたの上に、但馬の國の方まで暗れ渡つたやうに見ゆる空が清澄に透けて、今にもひばりが囀がりさうに見ゆる。刀三はいい想を得たから靜かにして呉れさいつてゐたが之もさうやら逃がしてしまつたらしい結果をみせた。かうして作句してゐることすら、考へやうによつては悲哀だなきいふ概念が頭をもたけて來てさうもそぐはない。かういふことはよく經驗することである。これは題を出した松郎がわるいさいふばかりでなく、さうも晝の雑談に満腹しすぎた結果でもあるらしい。

かくして緊張した作句氣分に浸るひまなく『悲哀』の句は締切られた。こんごも第一回のさき同様、前以て作者の名前を擧げて、一句一句風殺しに組上にのせて行つた。批評は可成り賑つたが、果し



編輯後記

遲日莊にて

▼四月廿四日、原稿を印刷屋へなげ込んでそのまゝ東上したので、五月號は宿屋で寝轉んで讀んだ。何んだか餘所の雜誌を讀んでるやうな違つたよるこびに接した。

▼五月號は誤植が多かつた。自分のもので云へば「多忙篇」の中の低徊趣味が徘徊趣味となつてゐる。「口語體の句」が途中からチヨン切られてゐるなどは全く眼もあてられぬ慘狀であつた。校正難さ心なき組版を思ふ。
▼東京では、かなりいろんな方にお目にかれた。その中の半数は初対面だつた。大變皆様に御迷惑をかけました、感謝いたして居ます。

▼五月四日歸阪。夜は本社の例會に出席した

▼九日は遅日莊の柳談會、記事は英豆が書いてゐるから一體を煩はさない。この日は川柳の研究と、私の面會日とを兼ねて晝から夜へ續く會合ですから、いろんな方に出席して貰ひたい。

▼五月十日に朝陽の夫人が亡くなつた。二柳子から葬ひの日に電話で知らされて、驚いて出かけた。二柳子も聞くなり直ぐ知らしたのですと云つてゐた。葬式へは二柳子と私と同行した。

本社六月例會

●時 日 一日午後七時より

●場所

大阪市南區日本橋一丁目
交又點北の辻東入南側

日本橋俱樂部
電話南三四二四番

●兼題 「壺」三句

●會費 參拾錢

初心者の來會を歓迎す

つた。双柳も多聞も葬列に交じつた。若い女の死はごいたまじいものはない。殊に小さな子ども遣して逝かれてはたまらない。あの元氣な朝陽も弱はつてゐるだらうと思ふと同情にたへない。

▼五月十七日に大阪日曜夕刊新聞社の社長上總天香先生が永眠された。先生は大阪の柳壇のために隠れた援護者であつた。近いうちに追悼會を催して、その靈を慰めたい

と思つてゐる。

▼函館の同人、龜井花童子が來阪したので十九日の夕南で逢ひ新町の九軒で呑んだ。翌二十日の夜は同人の召集を行ひ「落語を聴くの會」をやつた。顔は見てゐても話が出来ぬので、初対面の同人はあれが花童子だらう。それにしては一寸妙なところもあるが、全くの他人をつかまへて花童子にしてゐたりした滑稽もあつた。珍らしく美の作が顔を出したりしてうれしい會合だつた。花童子は廿二日に大阪を立つた。又今年の秋が來年の春には來るよと云つて梅田驛頭で別れた。窓硝子を越して夫人の微笑が見えた。

▼廿六日の夜、築港人事館の樓上で川柳六厘坊忌を管んだ。大阪柳界の先驅者の靈を慰めるに相應しい静かな夜だつた。いゝ月が出てゐた。私が六厘坊について少し話した。句報は次號に載る。

▼高知へ歸つた中澤濁水君が、高知柳壇を開設した。柳友の應援を切望する。

▼次に轉居さ改題をお知らせします。

△西原柳雨氏(東京市外野方町下沼袋電信隊)

△高橋大新樓(一五八〇) △白石雅想樓氏(東京市外大井町原五二〇四) △三好革郎君(大阪市外池田町七八五) △食満南北氏(大阪市住吉區住吉町七七〇) △早川右近氏(横濱市北方町小港四六) △熊本博久君(廣賀を博久「ヒロハサ」)

▲本號は二柳子と松郎と私とで編輯した。

(路郎生)

投稿規定

- ▼句稿は別紙に認め、住所氏名を明記する(ハツ)。
- ▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」ミ封筒に朱記する(ハツ)。
- ▼締切は嚴守されたし。
- ▼各地會報は清記の(ハツ)。
- ▼用紙は半紙又は同型の野紙に限る。
- ▼投稿其他につき御問合せはすべて返信封入の(ハツ)。

募 集

第三卷第八號課題

六月十日締切
(各題二十句以内)

- ▼頓服 安川久流 美選 塚崎松 郎選
- ▼牛 中川霧太 共選
- ▼青 井上刀三 共選

第三卷第九號課題

七月十日締切
(各題二十句以内)

- ▼寢臺 伊東夜叉郎選 柳川洲 馬選
- ▼水 橋本二柳子 共選
- ▼榮轉

每 號 募 集

- ▼近作柳傳(三十句以内) 麻生路郎選
- ▼各地柳壇(會報) 塚崎松郎編
- ▼文章(評論研究吟漫文)

社 告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

價 定

一部 參拾錢(郵)
 六部 壹圓六拾錢(郵)
 十二部 參圓(共稅)

料 告 廣

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりさ御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は箇人宛にしなさい事

大正十五年五月廿五日印刷
 大正十五年六月一日發行
 (第三卷第六號 每月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地 麻生 幸 二 郎
 發行所 川柳雜誌社 振替大阪三一五一四番

川柳雜誌社事務所

大阪市港區八條通二丁目十一番地
 振替大阪七五〇五〇番

店書擧賣
 (大阪) 明文堂 公立社 柳屋 岳文堂 和正堂
 (東京) 東條 (京都) 三宅 (神戶) 米田 後藤
 (金澤) 石井 (松任) 三須 (函館) 石塚

社主藤堂氏の
ための悪文！

變人の古本屋である。時々お
客さんに氣焔をあげて、あこ
であんなことを云はればモッ
ト本が賣れたらうにさ後悔を
るさこでろなご仲々うれしい
すおぢさんある。なんでも社
會に貢獻するために本屋をは
じめたのださいふてゐるがさ
うかも知れない。大いに讀ん
で（大いに買つて）このおぢ
さんを満足させて下さい。

|| 路 郎 生 ||

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南 五 六 二 番

水了軒のお辨當

旅行…に會集に

山をほめ海をたゝへてお辨當



大阪梅
田驛前

水
了
軒

電話 北一八三四〇番

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一圓一日發行）
 大正十五年五月二十五日印刷 大正十五年六月一日發行

第三卷 第六號（第二十九號）

定價金參拾錢



天然果汁の合成に成効せる
 唯一の權威を持つ

三ツ矢
 レモラ

レモン程自然の味を持つ飲料は
 ありません、天然の果汁天然の
 酸を以て理想的に出来た最新
 の飲料です、
 英京ロンドンに於ける斯界の大
 家の研究室から生れたレモラ是
 非御試飲下さる様お勧めします

日本麥酒釀造株式會社